

# 人間の経済

第2期 第 **43** 号 (通巻 121 号) 2006年4月9日

## 目次

自然エネルギーと二宮尊徳

森野 榮一

週刊マーケットレター(06年4月10日週号)

主要マーケット指標

ゼロ金利による株高、バブル膨らむ

米国経済強くドル買われる

曾我 純

市場はどこにある？

森野 榮一

MLから

quote of this week

## 自然エネルギーと二宮尊徳

化石エネルギーを地球より盗奪するのでなく、日々に降り注ぐ太陽エネルギーを尊重することの大事さにつき、二宮尊徳翁は斯くのごとく述べていましたね。

青柳又左右衛門曰、越後の国に、弘法大師の法力に依て、水油地中より湧き出、今に到て絶えずと、翁曰、奇は奇なりといへ共、ただそのいつしよ只其一所のみ、尊ぶに足らず、我道は夫と異にして、こと尤もつともき奇也、何国にても、荒地を起して菜種を蒔、あこ其まき実法を得て、是を油屋に送れば、たねいつと種一斗にて、油二升は急度出て、永代絶へず、是皇国固有天祖伝来の大道にして、にくしよくさいたいだんいほうしよく肉食妻帯暖衣飽食し、ちくけんふしよく智愚賢不肖を分たず、天下の人をして、皆行はしむべし、かいびやく是開闢以来相伝の大道にして、日月の照明ある限り、此世界有ん限り、間違ひなく行る、道なり、されば大師の法に勝れる、万々ならずや、かつ且我道又大奇特あり、一銭の財なくして、四海の困窮を救ひ、あまね普く施し海内富饒にしてなお猶余あるの法なり、其方法只分度を定めるの一のみ、…

(二宮尊徳、『よばなし夜話』)

まあ、ちょっとがらっばちに解釈すればこうなるでしょう。弘法大師が知らねえが、石油が出るからといって出るところは限られている。それにくらべて菜種を植えて油を搾るはどこでもできる。たとえ、肉食してようが妻帯してしようが、暖衣飽食してしようが、智恵があろうがバカであろうが、賢明だか不肖の人間かは問わず、これはできるし、陽の照る限りできるんだよ。…それに、己が分度を定めて為せば、一銭の財などなくても、困窮を救って、成果をあまねく分配して、人々を豊かにできるんだ、…と言っているかのようですね。

自然エネルギーに関心のある方、翁の言に耳傾けるべし、かな。

(森野 榮一)

## 週刊マーケットレター（06年4月10日週号）

2006年4月9日

曾我 純

### ■主要マーケット指標

為替レート	4月7日（前週）	1カ月前	3カ月前
円ドル	118.30(117.75)	117.85	114.45
ドルユーロ	1.2095(1.2115)	1.1890	1.2150
ドルポンド	1.7445(1.7375)	1.7355	1.7705
スイスフランドル	1.3010(1.3040)	1.3140	1.2695
<b>短期金利（3カ月）</b>			
日本	0.11250(0.11188)	0.09813	0.06688
米国	5.02813(5.00000)	4.87000	4.55000
ユーロ	2.76238(2.81700)	2.69088	2.49013
スイス	1.26000(1.24917)	1.18750	1.02833
<b>長期金利（10年債）</b>			
日本	1.875(1.770)	1.645	1.440
米国	4.98(4.85)	4.72	4.37
英国	4.41(4.40)	4.26	4.07
ドイツ	3.89(3.77)	3.61	3.25
<b>株 式</b>			
日経平均株価	17563.37(17059.66)	15726.02	16428.21
TOPIX	1783.72(1728.16)	1617.87	1684.90
NYダウ	11120.04(11109.32)	10980.69	10959.31
S&P500	1295.50(1294.83)	1275.88	1285.45
ナスダック	2339.02(2339.79)	2268.38	2305.62
FTSE100（英）	6026.1(5964.6)	5857.4	5731.8
DAX（独）	5952.92(5970.08)	5739.28	5536.32
<b>商品市況（先物）</b>			
CRB指数	337.18(333.18)	321.44	339.47
原油（WTI、ドル/バレル）	67.39(66.63)	61.58	64.21
金（ドル/トロイオンス）	588.4(581.8)	552.7	539.7

### ■ ゼロ金利による株高、バブル膨らむ

3月調査の日銀「短観」の業況判断は足踏みを示したが、日経平均株価は5週連続の上昇となり、00年7月以来の高い水準で引けた。一方、債券相場は下落し、利回りは急上昇したが、米国の堅調な景気を反映して、為替相場は円安ドル高となった。銅や金などの市況は引き続き強く、商品市況と一般物価水準の開きはますます拡大してきている。そのため資源供給国の資金は潤沢となり、そうした資金が世界の株式市場になだれ込んでいよう。

日銀「短観」によると、大企業製造業の業況判断（「良い」－「悪い」、%ポイント）は前回は1ポイント減の20%となった。大企業非製造業は1ポイント改善の18%となり、全産業では前期比1ポイント上昇の20%、先行きは横ばいと予想されている。中堅・中小を含む全規模全産業は前期比横ばいの5%、先行きは6%となった。景気拡大の長期化から業況判断は頭打ちとなっており、さらに大幅に改善することはないだろう。このように業況判断が横ばいになったにもかかわらず、株価が上昇し、利回りが上昇するのはなぜか。大企業製造業の経常利益は05年度下期、前年比5.8%に鈍化し、06年度上期はマイナス1.8%の減益予想も、市場には関係ないことなのであろう。「短観」を素直に読めば、株式売りの債券買いという運用が考えられるが、現実には株式買いの債券売りとなっている。

大企業業況判断の水準は20%とバブル期以来の高い水準にあるが、株式市場参加者はその水準が維持されると考えているようだ。しかも業況判断の横ばいによって、日銀のゼロ金利政策はまだまだ続き、ゼロ金利が株式投資を後押しすると判断しているように思う。ゼロ金利が外人買いを引き続き呼び込み、個人の信用取引を促し、株式の商いを活発にしているのである。政府・日銀も、実体経済がそこそこ維持されていれば、ゼロ金利の力によって株式市場に資金を流入させ、市場を活気付けることができると考えているのではないか。



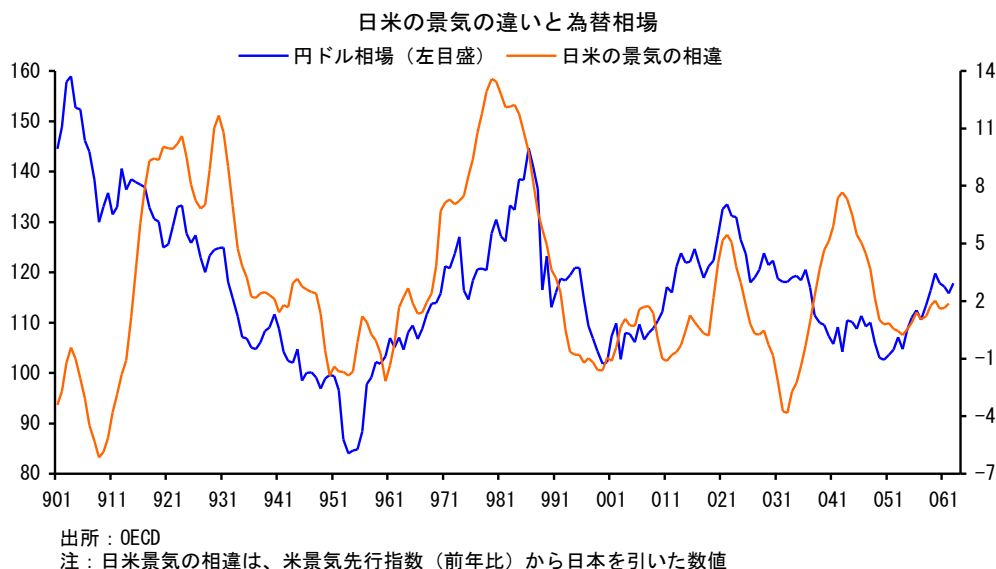
本来、長期金利の上昇は株式のマイナス要因だが、長短金利差の拡大は、銀行の収益を拡大させることになり、銀行の株価は上がるだろう。市場のウエイトが高い銀行株の値上がりは、市場全体の水準を引き上げる。株価が上昇すれば、銀行の株式含み益が増加し、不良債権処理もはかどることになり、公的資金の返済も進むだろう。株価を引き上げ、銀行の財務を健全にするばかりでなく、経済全体に活を入れる役割をゼロ金利に押し付けているのである。

小泉首相は「構造改革」を唱えながらも、ゼロ金利という劇薬投与を続け、日本経済を「投機の渦巻きの中かの泡沫となる」（ケインズ）事態に陥らせようとしている。80年代のバブ

ルが証明しているように、投機はいずれ行き詰まり、激しい景気後退に直面することになる。花見のように一時的な享楽で国民を誤魔化すのではなく、地道な経済運営をよって、変動の大きくない安定した経済を作る必要がある。ゼロ金利はそうした安定をもたらす経済とは対極の経済を目指しているとしかいいようがない。9月に退陣する小泉後の政権はゼロ金利解除によって大きく揺れ、短期政権になるかもしれないという危うさを抱えた発足になる。

## ■ 米国経済強くドル買われる

業況判断の横ばいに加えて、3月の新車販売台数が前年比1.7%減と9ヵ月連続の前年割れとなったことやマネータリーベース（3月、前年比1.0%減）の5年2ヵ月ぶりのマイナスなど、国内経済に不安がみえる半面、3月の雇用統計によって米国経済の強さが確認され



たことから、米長期金利は5%近くまで跳ね上がり、ドルが買われた。

2月のOECD景気先行指数によっても米国経済の拡大があきらかになった。日本の先行指数は前年比1.3%増加したのに対して米国は3.2%伸びた。EUも3.0%増と日本を上回り、日本の伸びが相対的に低いことが、円を弱くしている。基本的に、円ドルレートは日本と米国経済の相対的強さを反映すると考えて間違いない。両国の相対的強さをあらわす物指しにOECD発表の景気先行指数を使えば、以下のようなグラフを作成できる。円ドルレートはおおむね日米景気の相対的強さを示すグラフに沿った動きをしている。ただ、03年から04年にかけてのグラフの乖離は、財務省が巨額の円売りドル買い介入によって、為替相場を歪めた結果である。「短観」のように業況が横ばいで推移し、米国が拡大傾向を持続することになれば、円安ドル高は一層進むであろう。

## 市場はどこにある？

森野 榮一

地域通貨をはじめとして、わかりやすく簡単に、そういう要求が絶えることはありません。いちばんよいのは具体的な姿を見てもらうことですが、得心していただくには苦労いたします。

しかし、けっこう複雑なことでも、利欲に駆り立てられると人はなんなくこなしているものなんです。

例えば、最近株取引をネットを使って闇雲になさっていらっしゃる方々が増えているようですが、この場合もそうです。

株の売買も取引が電子化されて、参加者から見える部分が減ってきました。しかし、昔の、目に見えた時代の立会で競売買がどんな様であったかを思い起こすとイメージが広がります。

昭和初期はこんな感じでした。

立会の始まり。取引の開始です。当時は電鈴がなってこれを知らせました。

「リリリリ～ン」

取引員や場立ち（市場代理人）が手合取（売買記録の手控係）と玉取（手合取の手控と取引所の場帳を引合せる係）を従えて市場に集まり、受持ちの部署に着きます。

その一方で、市場内の高台になった場所に、取引所係員が着席します。彼等は撃拆係（拆（拍子木のこと）を打って値段を決定する係）や記帳係（売買を記録する係）、見張係（各売買者の売買の状況を見張る）などです。

さあ、立会という売買双方が互いに入り乱れる

競り合いが始まります。

撃拆係が拆を打つと第一部が日本郵船株から競り合いがはじまりました。

場立ちたちは、売りや買いを指で値段を指し示しながら呼び出します。それを市場係がそれぞれから発せられる売買の呼び値を見ながら、市場の気配を観察、これが最も適当という呼び値を捉えて指で値を示しながら呼びます。（買手の時は手を内に、売手の時は手を向こうへ向けます。）

この値段で売ろうとする者はこの値で買おうとする者と約定します。この値以上で買おうとした者もこの値で売ろうという者があるので約定します。

つまり、A売りB買い何枚、C売りD買い何枚とそれぞれに相手方を見つけて売買約定をいたします。そして売買の成立を告げるために手を拍ち合います。これを見た高台にいる見張り係が売買者の商号及び数量を呼ぶと帳簿係が一々場帳に記入していきます。こうしたプロセスが続いていくと気配は変わって行って新値を呼ぶこととなります。変化した新値で売買が成立するようになります。そして売買が出合いきって、もう売り方も買い方もなくなったと思うところを見計らって、最後に撃拆係が拆（き）を一撃します。

これを拆を入れるといいました。売買の終了です。

ここで、こういうルールがあります。

違った値段でのそれぞれの売買は、この、拆の入った最後の競合値段に変更して売買成立とするというものです。

もし最後の決定値段での売買を望まないときは、拆の入る前に反対売買をして、それまでの取引を振っておかなければなりません。場立ちは新値を付けて変化していく取引の気配を察知していく腕が必要だったわけです。

このように最後に公定相場が決定されるまでの複雑なプロセスを市場売買は経ていくわけです。しかもこれを、立会の限られた時間のなかでこなさなければならないわけですから場立人や市場係は非常な訓練を要する仕事でありました。

私たちはそういう光景をかつて見ていました。こんにち、この光景は通信回線のなかに消えていつています。市場の実際をさして承知もしていない「しろうと」の筋もいまや、取引手数料の値下げもあって、仕事の合間に携帯で売買注文を出す時代になってしまいました。

市場はどこにある？

通信回線のなかにあるのさ …

IT化の先に、その利便を享受しながら、再び「見える」ようにする工夫が必要な時代になりました。

そう、わかりやすく簡単に …

-ML から-

## 市場の大知

森野 榮一

市場経済の価値をもっともよく認識した、最初のわたしたちの先達は、なんとといっても、山片蟠桃でしょう。なんと1821年に、彼は「大知弁」を老中松平定信に上申しています（『夢の代』経済第六に所収される）。

彼のいう大知とは、「天下千億人の心知をあつめて大成したるもの」で、この大知の最良の例を大坂の米相場であるとしていました。すなわち、

天下の知をあつめ、血液をかよわし、大成するものは、大坂の米相場なり。大舜は心を用ひて天下の知をあつむ。この相場は自然天然とあつまり、大成して、天下に血液これより通じ、知の達せざるなく、仁の及ばざるなし。

彼にあって市場とは無数の知のあつまり織りなす大成物、これにより、仁の及ばざるなしのものなのです。たしかに、市場は一時的に盲いたかのごとき動きをするかもしれませんが、かならず大成するもの、と（まあこの時代、市場の失敗なんて現実には意識されなかったのでしょう）。

とはいいいながら、昨今の株式市場をみるまでもなく、

価値は見る人の目の中にある。人々が常に論理的で合理的であるわけではない。マーケットはちょうど個々の心理を集めたようなもので、どんな人々にも自己欺瞞、パニック、ヒステリーの可能性がある。（リンダ・デービス）

わけで、莫大な価値を付けた株式が無に帰すことも多く、人のすることゆえ、大成に至るに波乱があるは、人の迷い…

仁政の必要なゆえんです。

（2005年10月25日）

## 久しぶりに『夢の落葉を』（八木秋子）を手にする

森野 榮一

昨日は天気もよいので、ふだん手を付けぬ本の山を崩して整理していましたが、八木秋子著作集のIIが出てきました。

八木秋子といえば高群と並び日本の女性解放運動で忘れることのできぬ名で、近代の<負>を背負ったと評される人です。農村恐慌のなか長野を中心に起こった農村青年社的一件で獄につながれ、釈放後、渡満。波乱の人生でした。

その明晰な議論は別にして、郷里、木曾でのこども時代を背景にした小説、「夢の落葉を」は透明なその文章が好きで、これを収録した著作集のIIを出版社から一冊もらってきたのでした。20代のころのことです。

この作品は、

山にあけて、山に暮れる。どこを向いても、どっちに歩いても山しかない、永遠の谷間 - - そのふかい谷に五十年の歳月をたずねて、美しい子供たちの夢の落葉をあちこちから、ひろいあつめてみましょう。光るのや、鮮かな色のや、枯れしぼんだの、いろんな葉っぱが、なんとやさしくわたしの掌の上に載ることでしょう。むかしの生活と、そうして愛情のこの葉っぱ - - 静かにその語る言葉に耳をかたむけ、言葉を聞いて見たいと思います。



というのですが、そこに、おそらくは彼女の父親がモデルとおぼしき、役人の「木村」が出てきます。彼は、役人としての出世を辞退しつづけました。その理由は、

じぶんの求めているのは浮草のような、そして窮屈で安全なガラス鉢のなかで泳ぐことにあるのではない。彼を生み、彼の五十年を育ててくれたこのふるさと、木曾に生きぬきたいことにあったのです。どの山も、樹も枝も、彼のからだの一部分で、地中に張っている根はじぶんの足のうらに密着している。彼は木曾に生涯を生きて、骨をこの土に埋めたかったのです。

なのです。

その彼が役人を退職して町長になることになります。そうして彼は町の発展を構想しはじめます。

町の行政という舞台は決して大きなものとも思えないが、役所の穴からぬけだしてみるとまた別の世界で、自由でのびのびして人間の生活とじかに結びついた温かい息づきがありました。人間らしいのです。造られた権威でなく、種々雑多な人間のふれあいと問題とから生まれた自然の秩序なのです。

長と名のつく改まった姿勢の談合もあり、毎日顔をあわせるちがった顔ぶれも、持ちこまれる用件も、これはもう人事百般ともいえるもので、特に小うるさいこともあるが、どの一つも町民の生活と結びついたものでした。この大切な町民の生活に町長としての木村の判断が、施策

がどんなふうに関し、反響をよび起すことになるだろうか。それを思うと心がひきしまるようで、うれしいのです。

そうして、ここからさきです。

まず考えることは、町のひどく苦しい財政、つまり町民の貧しさです。これをどうして建て直すか - -。永いあいだの木曾住民の念願と努力が実って鉄道が開通した現在は、町民の経済は少しずつ変化を見せている。つまり旧時代は除々に崩れつつあって、他所からの資本が入りこんできた。同時に、もう福島町という孤立した存在ではなく、木曾全体としての考え方、その中核をなす福島これからの変化に対応して政治、経済、文化の基点をどこに置くか、という大きな課題なのです。

大きくいえば文化町ともいえるこの福島町は、諸官庁の出先機関や学校などが集まっていて、それでいくらか経済もうごいているのと、季節的な御岳山や馬市などで落ちる金に依存しているだけ。城下町のなごりで町民の気風はおっとりしていて、産業開発などについてもよほどでないとは動かないだろう。町の財政の建て直しにはまず御料局をうごかし、良材の払下げを促進させること、関西の電力会社の発電所設置の運動にとりかかろう。原木供給の点からして大製紙会社の工場誘致にも頼らなければならぬ。木曾はもう永いねむりから醒めるときがきた。それでこそ、福島町のこれからの発展もあるのだ。

この話は明治のころのことです。この木村の考えはながく各地に染み込んでいるものでしょう。

長い努力が地方を彩っています。しかしそれが報われたことは我が近代史にみつけることはできないようです。

私たちの課題は、そう、その先なのでしょう。しかし共有するものも多いのかもしれない。

(2005年11月11日)

## 治安、セキュリティ

森野 榮一

誰しもが以前に較べて社会が物騒になってきたという実感を持っているようです。

言われるように、社会の資産格差・所得格差・稼得機会格差が拡大することは、犯罪の増加を促す一要因でしょう。

ところで、格差社会は片方で有産富裕層を作り出しますが、その人々は己がプライベートのなかに成立する財産を犯罪から守るために各種のセキュリティ対策を講じます。

意外に忘れられている視点は、これが社会的に意味していることが、社会における犯罪の総量を減少させるのではなく、別のプライベートの領域や公共領域に犯罪を移転させているにすぎないということです。

ロスバードなどネオリベラルふう論客の見解は、いわゆる「豪華船」モデルですから、治安は民営化し、自らの負担でセキュリティを確保するというものです。

しかし、そこには総量を減らすという視点はみられません。格差がひろがればひろがるほど増える犯罪に対応して自己責任・自己負担の治安費用を自ら負担することになります。

国家や警察の治安維持機能は、たしかに限界があります。それにカネを使えばよいとい

う話ではありません。では、プライベートにまいもどるのでしょうか。

東京町田の地域通貨「花」は民間交番の維持に貢献しています。社会の犯罪総量を減少させたり、抑止するちからは公的領域を作る住民・市民のかかわりによる、相互関係です。俗に、「人目の関守(関所役人の意味)」という抑止力でしょう。

ネオリベラルは、税負担の増加による公的支出による治安維持に反対です。理由は税負担増が自己の財産を侵すからというものです。しかし、それが解決にならず、かえって社会不安を増大させ、彼らも望まぬ公的権力による治安維持を勢いづかせましょう。

それは、コスト的にみても、国家にとってよいことではありません。豪華船を守るために、富者の支出増を上回る費用負担が社会に発生するからです。

こうした費用負担を賄うために、富者がなすセキュリティシステムには、逆説的ながら特別な課税が必要でしょう。そうして犯罪抑止が社会的な義務で、それはプライベートを越えた人間関係の創造にしかないことを知らしめなければならないと思われます。

(2005年11月25日)

ゲゼル研究会では第二期「人間の経済」誌の原稿を募集しています。

ゲゼル研究会では会誌、「人間の経済」を刊行してまいりましたが、会員の各地に叢生する地域通貨の動きへの関与等により、刊行継続の体制がとれず、1年ほど休刊のやむなきに至っております。

しかし、社会経済状況の変化や多様化する各地の貨幣改革の展開を見るに、時宜を得た会員の諸研究を世に問う必要性を痛感しているところです。

また、各地からの問い合わせ、情報提供の依頼も多く、会としての系統的な情報の提供、焦眉の課題に関する研究成果の迅速な公開の必要性も強く感じてきたところです。

今般、体勢を立て直し、会誌「人間の経済」再開（第二期創刊）に取り組むこととなりました。

基本的な会誌の性格は第一期と変わるものではありません。

理論的な研究から各地の取り組みの現状、そのナマの声まで、多様なテーマの論考を掲載していきたいと考えております。

広く論考を求めていますので、諸姉諸兄のご支援、ご協力をお願いいたします。

第二期、「人間の経済」、簡易印刷版、及びHPでのPDF版提供

不定期刊

投稿資格 特に設けず

投稿 常時受け付け

投稿論文の著作権は著者に帰属

原稿料はありません

ご連絡は [info@grsj.org](mailto:info@grsj.org) まで。

編集・発行 ゲゼル研究会

221-0021 横浜市神奈川区子安通3-321 森野榮一 気付

Gesell Research Society Japan

<http://grsj.org/>

info@grsj.org

Gesell Research Society Japan all rights reserved 許可無く複製・再配布を禁ず